九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

嶋田忠臣論断章

後藤, 昭雄
大阪大学教養部助教授

https://doi.org/10.15017/11993

出版情報：語文研究. 60, pp.9-17, 1985-12-15. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

嶋田忠臣論断章

後藤昭雄

嶋田忠臣（天長五年828～寛平四年892）は現在に家集を伝える数少ない詩人として貴重な存在である。しかし、『田氏家集』三巻に二百十余首の詩を伝えながら、これにもとづいてその人となりを論じたものはきわめて少ない。[1] 家集を残す稀少な詩人として、なおもっと論じられてよいであろう。

忠臣は菅原道真の岳父に当たる人物であり、学問の世界においては、道真の父是善の門人で、その高足として若き日の道真の教導者であった。すなわち、忠臣は道真に最も近い存在であるが、その近縁性は、こうした見やすい縁戚、学統関係のみではなく、より注目すべきこととして、それぞれの詩作に見られる意識、志向にも見いだされるのである。[2]

このような視点から、本稿では、忠臣論の一つとして、対比すべきものとして道真の詩を視野に入れながら、田氏の詩を読んでいくことにしよう。

一

元慶七年（八八三）正月、忠臣は美濃介に任ぜられ、任国へ下った。外官を帯びて都を離れることは今が始めてのことではなかったが、三度目の離京体験の中で、忠臣は、彼において、官人であることと詩人であることとがどのように意識されていたかを語っている。

はじめに124[3]「和下藤進士秋日過二関門一問二美州風俗一新詩上」（『田氏家集』巻中所収。以下本節にあげるものはいずれも同じ）をあげよう。藤進士の「関門を過ぎりて美州の風俗を問ふ」という詩に答えたものである。「関門」は、美濃には三関の一つ不破関が置かれていたのをいう。

自分元知命在天　自分に元より知る命は天に在ることを
彫蟲曽未学烹鮮　彫蟲曽って未だ烹鮮を学ばず
武城下邑牛刀鈍　武城の下邑牛刀鈍し
何用無才報有年　何ぞ無才を用ちて年（みのり）有るに報いむ

「彫蟲」は詩文を作るのに字句を飾り、小細工を施すことであるが、ここでは自らの行為を謙遜していう。「亨鮮」は小魚を煮ること、『老子』第六十章に「大国を治むるは小鮮を亨るが若し」とある。第三句は、これも有名な『論語』陽貨の、孔子が武城に行き、弦管の声を聞いて、「雞を割くに焉んぞ牛刀を用いん」―小さな町に大袈裟なことだ、と笑ったという故事をふまえる。

まず、この詩に述べられていることの一つは、自分は国司としては無能であるという意識である。そうした意識は同時の他の詩にも見えており、120「奉レ呈二野秀才詩伯一」に「関東に吏と作りて顓愚を愧づ」、全部はのちに改めて引くが、105「拝二美濃一之後、蒙二菅侍郎見レ視レ喜二遙兼二賀州一詩草一。依二本韻一継和レ之」に「三刀の夢は不才を誤りて酬いらる」、118「和二野秀才見レ寄秋日感懐詩一」に「才拙くして分憂幾たびか坐馳せし」などの句がある。「顓愚」は愚かなこと、「三刀夢」「分憂」はともに国司の職をいう。

こうした措辞が繰り返されていることから、国司として無能であるという言辞は単なる表面的な卑下ではないのであろうが、もとの詩に戻って注目すべきことは、第二句に、その国司としての無才が、詩文を作ることと対比して述べられていることである。すなわち、詩文の制作を事としてきた自分は領国の経営には無知であるという。そうして、そのような資質は天与のものであるという。

詩人であることと官人であることと。次の詩もこのことに関るものとして読むことができるように思う。

127　衙後晩望吟懐

東来不覚換炎涼　東のかたより来たり覚えず炎涼換はる
晩望寒陰猶自傷　晩に望めば寒陰なほ自ら傷ましむ
氷合弓膠堅水沢　氷は弓膠と合して水沢に堅し
年随箭漏促時光　年は箭漏に随ひて時光を促す
昏村偏賀秋収稔　昏村には偏へに賀ふ秋収の稔
家業還愁荒学耨　家業還りて愁ふ学耨の荒れたることを
外吏三餘無暇日　外吏は三餘も暇日なし
且因衙退閲詞章　且く衙退に因りて詞章を閲せむ

後半、豊年を喜ぶ村里の喧騒をよそに、学業の荒廃を愁え、繁忙な務めの中で、任務を終えた後のわずかな閑暇を求めて、詩文に見入るという。

まず第六句、「家業」は学問であるとするが、これには道真に、120③「予作二詩情怨一之後、再得二菅著作長句二篇一云々」に「家業年租本より詩を課す」の句があるのが想起される。また、学問の荒廃を憂えるというのには、やはり道真の、小野美材の死を悼んだ「詩人もまた歎く道の荒蕪せむことを」（502「傷二野大夫一」）の句が思い合わされる。

この詩には、そうした学問こそ我が家業であるという意識と相即のものとして、民衆の生活に背を向ける姿勢が示されている。

それはこの詩ばかりではない。

元慶七年、美濃は大雪にみまわれた。そのことを詠んで次のようにいう。

131　府城雪後作

濃土近年看雪少　濃土近年雪を看ること少なし
今冬改観変州疆　今冬観改まり州疆変ず
簷氷数尺垂銀穂　簷氷数尺銀穂を垂る
渓水横分泛玉漿　渓水横分して玉漿を泛かぶ

野老始知春澳沐　野老始めて知る春澳沐せむことを
農夫只渟歳豊穠　農夫ただ渟ふ歳豊穠ならむことを
愚蒙未得推天意　愚蒙未だ得ず天意を推しはかること
唯愛衙前潔白光　ただ愛す衙前潔白の光

第五句、「澳沐」はおそらく「燠沐」の誤りで、めぐみをうけること。『後漢書』明帝紀に「朕親しく藉旧を耕して以って農事を祈らむ。京師冬宿雪なければ、春燠沐せじ」とある。大雪はその年の豊作を約束するものなのである。従って農夫はひたすらそのことを言って喜ぶ。しかるに忠臣はここでも自らを「愚蒙」と、国司としての無才をいいつつ、心は別の方に向いていく。その心が向かうのは、ただ雪の純白の美しさを賞翫することである。ここでも忠臣の志向は治下の民衆とは全くかけ離れているのである。この詩の前に置かれた 130「元慶七年冬美濃大雪、以レ詩記レ之」には「且く農歳の瑞を誇張することなかれ」という直截な表現さえある。

大雪を豊作の瑞兆として喜ぶ州民の心とは無縁の、これをひたすら賞美の対象として見る観照的姿勢は、詩人のそれというべきなのであろう。忠臣は早く 4「早秋」（巻上）を詠じた詩に、

感傷物色還成癖　物色に感じ傷むまた癖と成る
此癖無方莫肯治　此の癖方なしあへて治することなからむ

と述べている。物色に感傷する多感さがその性癖となっているという。そうした性癖のもとで、彼は州民に背を向け、ひとり雪を美として観照するのである。

また、105「拝二美濃一之後、蒙二菅侍郎見レ視レ喜二遙兼二賀州一詩草上。依二本韻一継和レ之」がある。「菅侍郎云々」は、道真の100「喜レ被二遙兼二賀員外刺史一」をいう。道真もこの時、それまでの侍従、式部少輔、文章博士に加えて、遙任であるが加賀権守を兼ねた。そのことを述べて送られた道真の詩に和したのがこの忠臣の詩である。

師家狐白例名裘　師家の狐白例として裘と名づく
閭巷龔黄豈化州　閭巷の龔黄あに州を化さむや
重席珍称無価久　重席の珍は無価と称せられて久し
三刀夢誤不才酬　三刀の夢は不才を誤りて酬いらる
君抛虎竹承兼世　君は虎竹を抛ちて兼世を承く
来章述レ里世遙兼二賀州一之意上、故云
我負鶯花度数秋　我は鶯花に負きて数秋を度らむ
雖是除書同日到　是れ除書同日に到ると雖も
甘棠樹下少風流　甘棠の樹下風流少なからむ

第二句、「龔黄」は漢の龔遂と黄霸。循吏として名高く、道真も讃岐守時代の詩に「龔黄の徳化宣べむことを夢想す」（『菅家文草』巻四262）という。第五句の「虎竹」は国司の地位を示すもの。第五句に付された自注「来章に里世遙かに賀州を兼ぬる意を述ぶ」は、第五句に「君は虎竹を抛ちて云々」と辞を措いたことの理由を説明するが、「里世」遙任として加賀国司を兼ねたことを述べた「来章」とは、道真の詩の第二句に「最も喜ぶ先君も此の州に任ぜられしことを」というのを指すのであろう。

さて、この詩で注目したいのは第六句以下である。同様に国司に任じられたものの、遙任として都京を離れることのない道真の立場と対比しつつ、自らの境遇を述べる。

第六句と第八句は同じことを言葉を換えていう。第八句の「甘棠」はカタナシ。『詩経』「召南」に「甘棠」があるが、この詩は、毛伝によれば、周の召公は村々を巡行したが、人々に迷惑をかけまいと

小さな棠の木の下に野宿した。そこで村人がその徳をしのんで歌ったものという。

美濃介としてこれからの数年を任国に暮らす我が身は「鶯花」とは無縁の日々を過ごさなければならない。すなわち、地方官としての生活は、まこと「風流少ない」ものである、と詠む。

この詩は、「鶯花」つまり「風流」を国司としての立場に対置させ、両者を相背反するものと捉えている。すなわち、この詩もまた、国司たる立場と詩作の関係を述べ、上述の詩と一連のものとなる。この詩の制作時期は、内容から、前引の諸首に先立ち、美濃介拝任の直後と考えられる。忠臣は、その当初からこのような思いを抱懐しつつ、任国へ下ったのである。

叙上の詩から、美濃にあって忠臣の置かれていた立場もおのずから推測されるのであるが、はたして次の詩がある。

125 和二藤進士客中遇レ雪見レ寄

関左崎嶇膺帝難　関左崎嶇として帝の難に膺たる
孤心遇雪更増寒　孤心雪に遇ひて更に寒さを増す
郷村咲我巴人曲　郷村我を咲ふ巴人の曲
慙愧高才往復看　慙愧づ高才往復に看るを

「関左」は関東つまり美濃をいう。「巴人曲」は謙称して自作の詩。注目されるのは第二句の「孤心」の語である。前引の諸首に州民とは一線を画してひたすら自己の世界を堅持しようとする態度を見せていたことを考え合わせると、この「孤心」の語は、忠臣の置かれていた、あるいは自ら置こうとしていた立場をよく示すものと思われる。

国司という立場のもとでの上述のごとき意識は道真も等しく抱くものであった。

仁和二年（八八六）からの四年間を道真は讃岐守として任国に過ごすが、その讃州客中詩にそれは示されている。

すでに 187「北堂餞宴」に、

倩憶分憂非祖業　倩憶ふ分憂は祖業にあらざることを
徘徊孔聖廟門前　徘徊す孔聖廟門の前

の句がある。早くも赴任に先立って「分憂」、国司の職は「祖業に非ず」と表白する。

讃岐での二、三の例をあげると、221「路遇二白頭翁一」に、

欲学奔波身最嬾　奔波を学ばむと欲するも身最も嬾し
将随臥聴年未衰　将に臥聴に随はむとするも年未だ衰へず
自餘政理難無変　自餘の政理も変なきこと難し
奔波之間我詠詩　奔波の間に我は詩を詠ぜむ

「奔波」は先任の讃岐国司として良吏の誉れ高かった安倍興行の治国の方法。その方法に学びながらも、我は我、治政の間にも詩の詠作をやめることはできないという。

274「冬夜閑思」には、

案暦唯残冬一月　暦を案ずれば唯冬一月を残すのみ
居官且遣秩三年　官に居りて且がつ遣る秩三年
性無嗜酒愁難散　性酒を嗜むことなければ愁ひ散じ難し
心在吟詩政不専　心詩を吟ずることに在れば政は専らならず

と賦す。「心は詩を吟ずることにあれば政は専らならず」とは、まことに直截に、いわばその本音を吐いたものであろう。

251「四年三月廿六日」と題する詩には、

好去鶯花今已後　好し去れ鶯と花と　今より已後

冷心一向勧農蠶　冷じき心にて一向(ひたすら)に農蠶を勧めむ

の句がある。後句の「勧農蠶」は律令の用語で、国守の職分をいう。次に引くほぼ同時に作られた「春日独遊三首」を参照すると、「鶯花」は作者の詩興をかき立てるものとしてある。それが過ぎ行く春と共に去るならば去れ。これからは荒涼とした思いを懐きつつ、ひたすら国守としての勤めに励むこととしよう、というのである。

すなわち、この詩は、先に述べた忠臣の105「拝二美濃一之後云々」の詩と比較するに、「風流」を「鶯花」に代表させる点で共通するのみならず、さらにその「鶯花」を国司たる立場に対置させて捉えている点で、きわめて近いものがある。

また248「春日独遊三首」に、

花凋鳥散冷春情　花凋み鳥散じて春情冷じ
詩興催来試出行　詩興催され来りて試みに出で行く
昏夜不帰高嘯立　昏き夜も帰らず高く嘯きて立てば
州民謂我一狂生　州民は我を一狂生と謂はむ

と詠む。前に忠臣の州民に背馳した詩人的姿勢が彼を孤立させたさまを見たが、この詩で道真が歌うのもまさにそのことである。

挙例は以上にとどめるが、このように、国司たる職務は本業にあらず、学問、詩作こそが家業であるとする立場を基盤として、国司の勤めは風流とは無縁であるという意識、国司としての任務よりも詩作に重きを置こうとする姿勢、周囲と相容れぬゆえの孤絶感など、忠臣と道真との間には類同性を看取することができる。

道真の讃州客居詩は百五十余首もが伝わるのに対し、忠臣の美濃介時代の作はわずかに十六首が残るに過ぎない。十分な比較考察はもとより不可能であり、以上もその一面ではあろうが、最も基本的な所で類似を示しているといえるであろう。

二

『田氏家集』中の詠物詩としては一つのまとまりをなして、詠竹の詩がある。以下、それらの詩が提示する問題について考えてみよう。

忠臣は、竹を寒さにも衰えることのない貞節を保つものとして愛賞する。そのことは次の詩によく示されている。

77　対レ竹自伴

静地閑居伴竹林　静地の閑居竹林を伴ふ
自餘人事不相侵　自餘の人事は相侵さず
中虚猶合□庭実　中は虚しくなほ庭実□
外密終期起砌陰　外は密にして終に砌陰に起つを期す
風有作声如会嘯　風に声を作すこと有り嘯くに会へるが如し
霜無変節是同心　霜にも節を変ずることなし是れ同心
世間交結真朋少　世間の交結真朋少なし
唯対青苾契断金　ただ青苾に対ひて断金を契らむ

（巻中）

第三句「庭実」は『左氏伝』の語で、本来、庭に並べられた貢物の意。ここでは竹林を指していう。白居易の「養竹記」（『白氏長慶集』巻二十六）に「君子人多くこれを樹えて庭実と為す」とあるのによる。[5] 第六句「霜無レ変レ節」は、寒さのために衆木が凋落する中で、竹が緑を失わないことをいうが、このような捉え方は、唐太宗の「賦二得竹一」（『初学記』巻二十八竹）に「翠葉負二寒霜一」、陳子昂

の「与二東方左史虬修竹篇一」に「歳寒霜雪苦、含レ彩独青青」など、すでに見える。末句の「青青」は草木の青々とした様子。また「断金」は『易』「繫辞伝」に「二人心を同じくすれば、其の利きこと金を断つ」とあるのに出て、交情の厚いことをいう。

紛々たる世間の軽薄に対置させてその貞心の故をもって竹を慕わしいものとする。

類似した発想は、竹を詠じてではないが、他にもある。

60　題二松下石一

松為鬱茂石為堅　松は鬱茂たり石は堅たり
同類相求自得縁　同類相求めて自ら縁を得たり
松石無心猶若此　松石は無心なるもなほ此くの若し
人間交結独依然　人間の交結は独り依然たり　（巻上）

「松下の石」を詠じてその貞堅の性をいい、人間の交りのしからざるのに対比する。

ところで、以上の二首ともに「交結」の文字を含むが、忠臣にとって「交結」ということは格別の関心事であったように思われる。

81　照鏡

……　……
閑亭独坐無遊伴　閑亭に独り坐して遊ぶ伴なし
毎覓交朋発鏡頻　交朋を覓むる毎に鏡を発くこと頻りなり　（巻中）

また全部は後に引くが、82「独坐懐古」（巻中）の第一聯に、

交朋何必旧知音　交朋は何ぞ必ずしも旧知音のみならむや
富貴却忘契闊深　富貴は却って契りの闊く深きことを忘れしむ

の語がある。さらに、「詩人無用論」の存在を記すことで注目される44「春日仮景訪二同門友人一」（巻上）にも

友道交情常欲深　友道交情常に深からむことを欲す
適将何事効知音　適に何事を将ってか知音に効はむ
……　……
只今鄭重来相訪　只今鄭重に来りて相訪へるは
為是同門契断金　是れ同門の断金を契らむが為なり

という。ちなみに、この詩は「契二断金一」の措辞を用いることも先の「対二竹自伴一」と共通する。

またこの詩とほぼ同時の作46「晩春同門会飲、翫二庭上残花一」（巻上）には、

結交童卯遂長期　結交は童卯よりして遂に長期なり
即事春遊何太遅　即ち春遊を事とすること何ぞ太だ遅き

の文字がある。

こうした〈交結〉に言及する詩の少なからぬ存在は忠臣の性情を示すものであるとともに、また人間に真の知己を求めがたい当時の世情をものがたるものであろう。かくして詩人の心は自然物に向かうのである。

「対竹自伴」詩は『家集』の排列に従うと元慶五年の作ということになろうが、それ以上の制作事情は不明である。いわゆる「詩人無用論」などと関るものとして解釈したい思いに駆られるが、勝手な推量は慎しむとして、「世間」には「変節」が横行し、そうした中での「交結に真の朋は少し」と作者を慨歎させる風潮が存したことは確かである。かかる弊風のもとで、歳寒にも変わることのない竹の貞性は、周囲の圧迫にも屈することのない詩人と「同心」のもの

として、まことに好ましい存在となる。

次いで詠竹詩をあげると、

157　密竹有二清陰一

世事探湯焦爛期　世事探湯焦爛の期
恨来曽入竹陰遅　恨み来る曽つて竹陰に入ることの遅きことを
曠然懐裏何相似　曠然たる懐裏何にか相似たる
簟衽無塵櫛沐時　簟衽塵なく櫛沐の時

（巻下）

がある。第一句について、先学の論は、当時の世情を述べたものと解する。[8] そうであるとすれば、これまた「詩人無用論」のごとき文人相軽んずる時代風潮を語るものとして、かつてそのことを述べた私としても、これに左袒したい思いがあるが、これはどうもそうは解しがたいようである。それは、「探湯」とは沸騰した湯に手を入れることであるが、『列子』「湯問」に「日初めて出でて、滄々涼々たり。其の日の中するに及びて、湯を探るが如し」とあり、昼日中の暑さをたとえる。また白居易の「竹窓」（『白氏長慶集』巻十一）と題した詩は、新たに長安に居を卜して一堂を営み、まず竹を植えたことを賦すが、これに次のような表現がある。

是時三伏天　是の時三伏の天
天気熱如湯　天気熱きこと湯の如し
独此竹窓下　独り此の竹窓の下
朝廻解衣裳　朝より廻りて衣裳を解く
軽紗一幅巾　軽紗一幅の巾
小簟六尺牀　小簟六尺の牀
無客尽日静　客なくして尽日静かに
有風終夜涼　風有りて終夜涼し

「三伏」は夏の最も暑い時をいうが、その暑さを「湯の如し」とたとえるのは、すなわち先の「探湯」である。そうして、その炎暑の中での竹窓の下の清涼を詠うのがこの詩の主題である。たとえば、この白詩を読んだのちに顧みれば、「密竹有二清陰一」の第一句は、単に炎熱の時をいうものであろう。そうしてこの「竹窓」詩がそうであるように、炎熱の中での竹陰の清冷を好ましいものと詠ずるのである。

この詩とほぼ同じ寛平二年夏の作として、154「夏日竹下命二小飲一」（巻下）がある。

世上清冷風竹前　世上清冷なり風竹の前
人間歓楽酒盃仙　人間の歓楽酒盃の仙
家庭養緑尋常醉　家の庭に緑を養ひ尋常に醉へば
応是他生作七賢　応に是れ他生七賢と作るべし

第一句は前詩と同様のことを詠ずるが、以下は、前詩と異なり、酒を詠み、そのことによって、作者の心は「七賢」すなわち竹林の七賢に向かっていく。

忠臣には、竹を詠じて七賢に及ぶ詩が外にもある。

140　対レ竹懐レ古

後生暫有慰先魂　後生暫く先魂を慰むること有らむ
嵇阮淹時不及門　嵇阮時を淹しくして門に及ばず
対竹莫言人不見　竹に対ひて言ふことなかれ人見ずと
須知暗裏二賢存　須く知るべし暗裏に二賢の存するを

（巻下）

「嵇阮」は七賢の中心、嵇康と阮籍。

また 165「秋日竹日懐ㇾ古」にも

……　　……

貞穿霜月時雖有　貞は霜月を穿ちて時に有りと雖も
吟助寒風傍若無　吟は寒風に助けられ傍らになきが若し
嵇阮類同今懐古　嵇阮類同なり今古を懐ふ
後於百草一叢孤[9]　百草に後る一叢の孤

末句は、最初の詩にも類句があったが、衆草が寒さに凋零する中でひとり竹のみが緑を保つことをいう。白居易の「題二李次雲窓竹一」（『白氏長慶集』巻十三）に「千花百草凋零後、留向二紛紛雪裏一看」、道真の 157「疎竹」に「可ㇾ愛孤叢意、貞心我早知」とある。そうした孤貞の節を嵇康・阮籍も同じように堅持したとして、慕わしい人物として思いを馳せるのである。

さらに、引用は省略するが、竹林の七賢を主題とした 213「題竹林七賢図」（巻下）もあり、竹林の七賢を詠詩の対象とするのは確かに忠臣における特徴といってよいであろう。それゆえにこそ、先学にこれを論じた論文がすでに備わるのであるが、私は、このことをも含むこととして、これら二首が、「対竹懐古」「秋日竹日懐古」と、ともに「懐古」と題されていることに注目したい。集中にはさらにもう一首「懐古」と題する詩がある。[10]

82　独坐懐古

交朋何必旧知音　交朋は何ぞ必ずしも旧知音のみならむや
富貴却忘契闊深　富貴却つて忘る契りの闊く深きことを
暗記徐来長置榻　暗かに記す徐来れば長に榻を置くことを
推量鍾対欲鳴琴[11]　推量す鍾対へば琴を鳴らさむと欲するを
巷居傍若顔淵在　巷に居れば傍らに顔淵の在るが若し
坐嘯前応阮籍臨　坐して嘯けば前に応に阮籍が臨めるべし
日下閑遊任意得　日下の閑遊意に任せて得たり
免於迎送古人心　迎送を免る古人の心　（巻上）

第三句、徐は徐穉。『後漢書』徐穉伝に「蕃、郡に在りて賓客に接せず。唯穉来たれば特に一榻を設け、去れば則ちこれを懸く」とある。陳蕃は友人の徐穉以外は来客とは会わなかったという。次の句は、真の知己である鍾子期の死後は、伯牙は二度と琴を弾かなかったという周知の両者の交友を詠む。第六句、阮籍が嘯にすぐれていたことは「竹林七賢論」（『芸文類聚』巻十九嘯）に見える。

第四聯にいうごとく、これら過去の人々とは、現実での交友におけるがごとき迎えたり送ったりの煩わしさなどからも解き放たれて、いついかなる時でも、どこででも、自分の思いのままに、心を通い合わせることができるのである。第一聯は、「交朋」の語を含むことから先に引いたが、ここでも注目したい。そこで見たように、忠臣にとって「交結」ということは格別の関心事であった。初めにあげた 77「対ㇾ竹自伴」に述懐するように、忠臣には「世間の交結真朋少し」という感懐があった。そうした思いが、「交朋は何ぞ必ずしも旧知音のみならむや」として過去に向かうとき、懐古詩となる。すなわち、第一句は、なぜ懐古詩を作るかを自ら述べるものである。

忠臣における竹林の七賢を詠じた詩は、このような思念から作られた、彼において特徴的な懐古詩の一つとして理解すべきものと思う。

論を詠竹詩に戻すと、竹を主題とする詩はもう一首、160「和ㇾ前菅讃州竹奉ㇾ謝二源納言一詩一」（巻下）がある。「前菅讃州」は前讃岐守

菅原道真。すなわち、道真の329「奉レ謝三源納言移二種家竹一」―源能有が道真宅の竹を自邸に移し植えたことに感謝しての作―に和した詩であるが、本文の引揚は省略する。

『田氏家集』に残る詠竹詩は以上である。集中の詠物詩としては一群をなし、詠菊の詩が六首であるのと並ぶが、詠菊詩が単なる詠物詩にとどまるのと異なる。

忠臣が竹を詠作の対象とするのは、その高節を自己に重ね合わせ、また現実の交友に飽き足らぬ思いが竹への眷恋の情を促すからである。あるいは世間に知己を求めえぬ嘆きが過去に目を向けさせ、そうした過去への志向と竹を賞愛する気持ちとが重なり合って、詠竹懐古の詩を生んでいる。

詠竹の詩篇は道真にもある。それら道真の詠竹詩については以前に述べたことがある。[12] 従って、忠臣の詠竹詩と道真のそれと、どう近似し、どう異るのか。詳細に説くこともできるが、その必要はないであろう。要点を記す。

その堅貞の性質を賞愛して、それぞれに詠竹を主題とした少なからぬ詩の制作のあることが、基本的な所での類同である。そうして、その最もの相違は、道真の目が過去に向かうことがないことである。その詠竹詩には竹林の七賢にふれたものは片言もない。忠臣にあっては、世上には知己を得難いという思いが先賢を追慕させたのであるが、周囲に知己を求め難いという失望は道真にもあった。526「書斎記」には「唯我を知る者は其の人三許人有るのみ」という述懐がある。しかし、そこから過去に思いを馳せるという発想は出てきていない。このことを顧慮すると、翻って忠臣の詠竹詩に懐古の姿勢が顕著であることは、その精神の志向を示すものとして注目すべきことと思われる。

『田氏家集』の詩を読み解くことによって、忠臣その人の、またその時代の詩人たちの、あるいはその時代の問題を考えていかなければならないが、いまその一つとして、それらのことに資すると思われ、かつ対比すべきものを菅原道真の詩に求めうる二つの問題について考察を加えた。

注

(1) 金原理「嶋田忠臣傳考」(『平安朝漢詩文の研究』所収)がほとんど唯一の論である。ただしこの論文も題目からも知られるように、忠臣論を直接に目ざしたものではない。なお、私見の一端は注2の拙稿にわずかながら論及した。

(2) 拙稿「忠臣・道真・長谷雄」(『平安朝漢文学論考』所収)。

(3) 群書類従本に付した通し番号。

(4) 『菅家文草』は日本古典文学大系本による。番号はこれに付されたもの。

(5) 諸本「里世」であるが、これでは意味不通。疑問を残す。

(6) 小島憲之『古今集以前』二〇一ページ。

(7) 拙稿「文人相軽」(『平安朝漢文学論考』所収)参照。

(8) 金原氏注1論文、及び蔵中スミ「田氏家集と『竹林七賢』詩」(『(大阪私立短期大学協会)研究報告』第9集。

(9) 諸本すべて「狐」。意によって改める。

(10) 注8の蔵中氏論文。

(11) 諸本すべて「鐘」。意によって改める。

(12) 拙稿「菅原道真の詠竹詩について」(『香椎潟』27号)。